

渾をたらした神

吉野せい作品集

作品集

神をたらしめた渾

刊生書房彌

©1975

検印省略

湊をたらした神（普及版）

1975年4月15日

初版発行

1977年5月20日

15版発行

著 者

吉 野 せ い

発 行 者

津 曲 篤 子

発 行 所

株式会社 彌 生 書 房

東京都新宿区中町18 電話・東京(200) 3707(代表)

印刷・(株)浩文社 製本・(株)小実製本印刷工場

〈落丁・乱丁本はお取りかえいたします〉

0095-75050-8525

序

串 田 孫 一

書くことを長年の仕事としている人は、文章の肝所を心得ていて、うまいものだと思心するようなものを作る。それを読む者も、ほどほどに期待しているから、それを上廻るうまさに驚く時もある。また、期待外れという時もある。

ところが、吉野せいさんの文章は、それとはがらつと異質で、私はうろたえた。たとえば鍍紙での仕上げばかりを気にかけて、そこでかなりの歪みはなおせるといふような、言わば誤魔化しの技巧を秘かに大切にしていた私は、張手を喰ったようだった。この文章は鍍紙などをかけて体裁を整えたものではない。刃毀れなどどこにもない斧で、一度ですばつと木を割ったような、狂いのない切れ味に圧倒された。

私は呆然とした。二度読んでも、何度読みかえしても、ますます呆然とした。そして体が實際にがくがくし、絞り上げられるような気分であった。「涙をたらした神」が最初であったが、この本に入れてある十六篇の作品は、去年から今年の初夏にかけて、三、四篇ずつ私の手許へ送られて来

た。私も段々に慣れて来てもよさそうなののに、その都度、最初の時と同じように狼狽した。

文章を書くことは、自分の人生を切って見せるようなものかも知れない。これは書く者の決意であり、構えであるが、実際その決意通りに行くことはなかなかない。構えることによって不必要な力が入り、ぎごちなくなり、不安が募る。

吉野さんはそれを澄まして事もなげにやった。澄ましてというのは、楽々という意味ではない。むしろ剛胆である。そしてその人生の切口は、何処をどう切っても水々しい。これにも驚嘆した。何かを惜しんで切り売り作業のようなことをしている人間は、羨望だの羞恥だの、ともかく大混乱である。

このうちの数篇は、私が編輯の手伝をしている『アルプ』という雑誌に渡したが、その掲載号が出るたびに私は持つて歩き、文学好きの友人知人に出会々と、その場で読ませた。そんなことをした憶えは他にないが、感想を求めたのでもなく、意地悪く反応を見ようとしたのでもない。ただ一人でも多くの人に読ませたいという至極あっさりした気持であった。

そしてこの出版を願ひ、薦めたのも、全く同じ気持からである。

一九七四年九月四日

目次

序	串田孫一	一
春		六
かなしいやつ		一六
涙をたらした神		三一
梨花		四一
ダムのかげ		五七
緒い畑		七〇

公定価格……………	八四
いもどろぼう……………	九六
麦と松のツリーと……………	一〇六
鉛の旅……………	一二三
水石山……………	一四二
夢……………	一五九
凍ばれる……………	一六六
信といえるなら……………	一七七
老いて……………	一九二
私は百姓女……………	二〇六
あとがき……………	二〇一

吉野せい作品集

涙^{はな}をたらした神

春

春ときくだけで、すぐ明るい軽いうす桃色を連想するのは、閉ざされた長い冬の間のくすぶった灰色に飽き飽きして、のどにつまった重い空気をどっと吐き出してほっと目をひらく、すぐにとび込んで欲しい反射の色です。白茶けた篠竹の葉の中央の緑が日一日と冴えて、少しずつ少しずつ緑の幅をひろげて来ます。杉は依然として緑褐色、松は古葉が半分風に落ちても半分はまだ世代の代りの緑にあこがれ、未練たらしく元葉となって枝にしがみついていて、遠目にも常緑樹とはいえない黄緑樹といったような半端な色合いで山を埋めているのが、何かしらふんぎりのつかないもどかしさで、ひとおもいにむしりとるような大風が吹きつって、さっぱりと緑の一色に代えてくれたら——。そして山の嶺々にすじを引いたり、点々とすわりこんだりしている白い残雪が少し位残っていて、その下から目醒めた紺色の山肌を却って鮮やかに活々させてみせ、爛漫の春は麓から里へと紅と緑を充たしてゆくでしょう。

秋の頃からぬくぬくと土の中に眠りこけていた蛙めらが、がちりとうないこんでひっくり返した

鍬の下から、まっぶくれにふくれた白い腹を春のひざしにさらけ出されてびっくりしてとび起きます。まちがって鍬先でその腹を真二つに切り裂くこともあります。知らずにやったこととはいえ、その残忍さに目を閉じて急いで土深く埋めてしまいます。空の色が次第に水色にとけて来ます。私は藪の間につづく唯歩くための一尺幅位の小径を、万能をかついで冬の間に墾した耕地に出て行きます。

いわゆる新切り叩きをするためです。

開墾は藪を刈り払って墾す時に、そのまま唐鍬で一鍬一鍬ひっくり返すだけなら能率は上がるのですが、雑草雑根がかたまりついていて、整地をするために叩きこわす時に非常に手間がかかるのです。その点二段返しという墾し方、つまり最初に鍬で切りこめるものだけをけずってうないこみ、その上から灌木の根っこや茅の根塊、篠竹の根茎などを墾してかぶせる。のろい二重の手間のようにですけど、さらけた土塊が凍みくずれていて、その根っこを叩いて土を落とし、竹の根をかき集めると大体の畑は出来上がっています。人に聞いたり経験や工夫で二段返しの開墾をやるようになってから、新切り叩きは楽になりました。楽といっても普通畑に鍬を入れるようなさくさくした生やさしいものではない。土は粘土まじりのごろごろです。掘り散らかされてある石も取り集めねばなりません。藪のうちは解らなかつたが、平地にして見ると乾地湿地の不様な高低がはげしく目立ちます。近いところはスコップや万能でほうり上げながらならします。ひどい湿地は溝を掘り

上げて排水をはかり、高みの部分から古むしろをモッコにして少しづつ土を運んでならします。骨の折れる仕事でした。しかし少しでも広い畑を持ちたいのです。馬鈴薯や陸稻や粟や、この瘦地の上へ実らせねばならない。それというのも家族が多いためです。バンと名づけた赤い犬、にわとりが八羽、あひるが三羽、これらの仲間の胃袋をふさぐ責任が、ひとからいわせたら馬鹿馬鹿しいと鼻であしらわれそうなことなのに、してやりたい責任を無理なく私らは感じているのです。

ご免なさい。ここで私はらと複数でよびました。伴侶のことです。原の低みに五六坪の天然の水の溜り場があります。ここも借地の一部でしたから、三羽のあひるはいつもここで自由に遊んでいました。どこから流れ寄ったのか少しばかりどじょううっこなどもぐり込んで住んでいたようで、やつらは頭から泥だらけになって泥水をつつき廻したり、水から上がって三羽が寄り合って首を横に曲げて羽根につっこんで気持ちよさそうに眠ったりもしました。一羽がオスで何ともいえない美しい濃緑色の頸毛が艶やかで、時折り警戒するようにすくと伸ばします。眩しく陽に光ります。二羽のメスは雉子羽根の地味な衣裳でしたが、時たま大きな卵を場所をえらばず産み放します。去年の秋ひなだった三羽をこの水溜りに放しておいたら、どこかの百姓じいさんが珍しい鴨とまちがえて三羽をつかみ抱えたそうです。びっくりして返してもらいました。今は一羽でさえにわとりの三羽位の重さがあります。それに物音に敏感で、鳶が低く空を横ぎる時など揃って空を見上げてガオウと鋭い叫びをあげます。八羽のにわとりは一羽がオス七羽がメス、無論白色レグホーン

などのはいらないう頃ヒドの日本在来ヒドの地鶏ヒドで、からだも小柄脚も短く、とさかも刻み目もこまかくちよきんと立って、真黒だったり少しばかりの差し毛があったり飛白カサリ模様だったり、その代りオスはひどく派手な金茶色の房々した羽根毛が目の下から頸一ぱいをとる巻き、動かすたびにひらりゆらりと輝いて揺れるのです。胴は黒味を帯び、つたてて垂れなびいたその尾羽根が黒緑色に光り紅と金色の羽根もまじり合わせてとてもすばらしい豪華さに見えます。うるこの生えた長い蹴爪を尖らせた威厳にみちた両脚で地面を踏みしめ、大きな赤いとさかを振り立てて胸を張って高いときをつくる時など、七羽のめんどりはほれぼれ見とれているようにしげしげと首をもたげます。

開墾畑をかきならしている時、時折りみみずが土の湿りから這い出して来ます。ゆりみみずという小さいものですが、みみずのいるところは土地がいいといわれていて私たちにはうれしい生物なのですが、にわとり共は見逃しません。八羽が勝手気ままに畑中を漁り歩きます。彼等の丸い目と鉤なりの嘴はまたたくまに私たちは見逃してやりたい桃色の細い姿をするする呑み込んでしまします。おんどりが太いやつをみつけると必ずめんどりを呼びます。すばやいメスがいきなりそれを嘴にはさんで呑みこみます。三四寸もある箸よりも太いものなのに決してかみ切ることなしに、のどを一ぱいひろげ目を白黒させて胃袋に収め満ち足りたようにク、ウツとなきます。こんなみみずをのんだとりの卵はたべたくないとその時私は少し胸を悪くしますが、でもこれらの卵は一尾の魚も食わずに毎日の労働に耐えてゆかねばならぬ私たちの体力を支える大切な動物蛋白の資源になるの

ですから、彼等も私らのために働いてくれるのだと思うと可愛くなります。あひるの卵は二倍以上の大きさに一定の産み場所をきめずに、だらしなく地^じ辺^べに転がっていたりします。茹でると大きい黄身の表面がくろずんで中身も冴えない黄色です。少しあくどい泥臭さがあってあまりおいしいとは思いませんが、これが中氣（脳卒中）には妙薬というはなしをきいてから、二十位たまと私は浜の祖父がその病気で寝ているのでそれを見舞いにして喜ばせ、代りに新鮮なあじや小びらめを貰って来ます。お互いに都合のいい物々交換がうれしいものでした。

五市さんの家でいちににわとりが盗られたことを聞きました。又さんのとり小屋の根太の下が掘られて、一晚に三羽も狐に盗られたことも聞きました。幸いうちのパン、バナナをつめてパンといっているのですが、りこうで少し臆病なためによく吼えます。あひるも同じく変わった音がすればゲツゲツとすさまじい叫声をあげます。夜は農具を入れる粗末なさっかけの中に入れて置くのですが、狡猾なこのどろぼうたちもけたたましい非常警鐘にはよりつけないと見えて、まだその被害は受けません。狐はよく菊竹山の蔭の方から夜な夜なく声がきこえます。一度に三羽を盗んでもそれは一部は途中の土に埋めておくそうです。そして何日かたってからくずれかけた獲物の肉を巣に運んで食う。これが狐にとっては一番たべ頃のうまい味なのだと、又さんは腹立ち半分、まるで自分がその肉を味わったようにいきりたって話してくれました。

小屋の戸袋の上にみかん箱にわらを入れて巣箱にしておきます。にわとりたちは入れ代わっては

そこに毎日三つ四つの卵を産んでくれました。夏になると蛇がかぎつけて盗みに来ることがあります。今は春です。蛇が這い廻るのには少し早い季節です。

ある日、私はどう数えてもメスが六羽しかいないことに気づきました。ココココと到るところを呼んで探しましたが、夕方になって皆止り木にとまってやっぱ一羽足りません。一番とさかが大きくてしゃれた形に左に垂れていて、少し緑がかった黒色で締ったからだつきの、人間ならばきびきびと目はしのきく機敏そうな惜しいメスです。きつといたちか狐にやられたのだろうと、私たちは哀れな犠牲者を悼みあいました。一羽欠けてもひどく寂しく見えるものです。でも私たちの畑仕事は段々忙しくなり、日がのびてゆくにつれ労働時間も長くなって、自身が疲れて、生きものたちに餌をやることも億劫に思う時もままありました。屑じゃがを煮たり、米糠をねったり青いものを切りまぜたり、犬には汗かけ飯を配ったり、でも彼等は充分とはいえない分を自分たちで広い畑から何かしらを漁っておぎなっていたようです。夕方私が一足早く仕事をしまつてその細い藪の間の小道を小屋へ帰って来る時、七羽のとりがコッコと続き、三羽のあひるがゲツゲツとよたよたお尻をふりふりつながります。バンが一番後からどれかが傍道にそれかかるとワンと吠えて列を正します。家に帰るのが皆うれいのです。餌にありついてそれからゆっくりと眠ることが出来るからでしょう。

私らが畑に働いている限り、彼等は私たちの目の届くところで動いています。そして夕方になると

必ず私の後にきまった順につき随うのです。ゲッゲッコッコワンワン、いつも同じ行進曲をくり返します。人気のない山の日暮れは私がさびしいように彼等もやはりさびしいのでしょう。細い月がかかっていたり、赤い夕映えが少しの雲を染めていたり、時には時間よりも早く日暮れのような黒い雨雲が烈しく流れていたりします。

私は大松の下ですぐ暗くなってしまう沢へ、鍋に夕食の米を入れ手桶を下げて一町ばかり下りて行きます。彼等は又そのあとをきまって追います。沢の水をにごされては困るので駆足で行って手桶に水を一ぱい汲み込み、それから鍋の米をとき始めるのですが、彼等は米とき水の流れに一斉に嘴をつっこみます。素早いやつが鍋の中へ嘴を入れてといた米をばしゃばしゃ呑みこむのです。私は柄杓を振り廻して追っぱらって、急いでゆすぎなおしふたをしめます。こんなことを話したら、きくと皆が下種げすな話だといったり、おもしろいといったりするでしょうが、ある日の夕方いつもの調子であひるが鍋の中に嘴をつつ込んだ時です。これはどうにもならない生理現象で、私は何だかさつきからお腹が張っていて思わず一発空砲をあげてしまったのです。と、これはどうしたことでしょう。彼等は一斉に棒立ちとなり、皆空に向かってクウと高い恐怖の叫びをあげたものです。恐らく生まれてはじめてきいた不気味な鳴音だったのか知れません。私はその夜とも、その実況を鮮明に伝えました。彼は真顔でいいました。

「やつらおそれ入ったんだよ」

その時は笑いころげたこの話も、現在はこの世に少ない静かな美しい話に思えてならないのです。

じやがいもをまき終わり、梨畑の梨の花の鱗片がほぐれて、うす緑色のかたまりあった書房がのびてその一本一本の先にちよっぴりうすべにはいた白い花卉のまるい形が、はずかしそうにふくれ上がって空を覗き出した頃の朝でした。戸外でとてつもない声をあげています。

「おいおい、出てみる」

私は洗いかけた飯茶碗を桶の中に又放り込んで、眩しい朝日の一面光る庭に出ました。どんな声かその時私のことからとび出したか思い出せません。兎にも角にもまるで降って湧いたように小さな雑草の生えはじめた土の上に、あのとさかの垂れためんどりと十一羽の黄色いひよこが晴々しくうごめいているではありませんか。風が風いでいるので、ひよこたちはふわふわした毬のようにふくらんで、黒い目が二つずつ円らについてきろきろ動いています。うす墨を落としたような差し毛や茶色のまだらな生毛などが入りまじっているけれど、黄色い細い脚をとにかくも踏んばったりよろめいたりしつかり歩いたり、はじめて見るこの新しい世界に驚いたり喜んだり戸惑ったりしているようです。親どりは何か地面からみつけ出しては嘴でつついてコココと呼び集めます。ひなは皆その方へ集まって来ます。にわとりたちの入口はまだあけないので、遠くからこの光景に目をつけて、あひると一しよにゲゲゲコココと翼をはばいたり押し合ったりして騒いでいます。パ

ンがびっくりした顔で鼻づらを突き出しながらも、私たちの様子を見て二三回低くうなっただけ、左右に首を傾けてひよこの挙動を不思議そうに見守っています。親どりは危険を感じたかククウとないて両翼をひろげる。ひよこは争ってその翼の中と胸の下へもぐり込んで、親どりの体形は二倍にふくれ上がって全部をかくしてしまいました。私は一握りの米をその目の前にそっと置きしました。またたく間にたべつくしました。どんなに腹が空いていたのか。二十一日間も私たちの目からかくれてどこでこの十一の生命を孵したのかが夢を見るようです。それにしてもこの姿のみすばらしい衰えようは、赤いとさかは白っぽくざらざらと湿けたせんべいの切れはしみたいに垂れ、胸毛はぬけて桃色のぼつぼつの地肌が丸出します。翼は灰を浴びたようで、五六本羽が抜け落ちそうに地辺をひきずっています。尻尾も赤いお尻が見えるほどふらふらとして、あのびっちり引きしまった隙のない面影はどこにも残っていません。生命をつくり出した親どりの必死さが衰れになりました。私は急いでにわとりどもの餌の屑じゃがを煮る鍋に二つの卵を入れて茹で、ひなのたべものの用意をはじめました。

ようやくその巢を熱心に探し当てました。それはここから三間とは離れていない右側の藪の中、背丈位の檜の若木が四五本、一尺ばかりのいい間隔で生えてびっしりと周囲は笹竹などでかこわれ、一本の藤蔓が檜と竹とを結び合わせるようにならみついて、竹の葉がうまく屋根根のように折り曲げられています。熊笹が根元のあたりに一面生えて、笹の枯葉やわら屑などが分厚く敷きつめら